

## 2021 年度災害文化研究会活動報告

2021 年 3 月 11 日、東日本大震災から 10 年を迎え、『災害文化研究』第 5 号では、「東日本大震災から 10 年、これからの 10 年」をテーマとした。災害文化研究会ではこの第 5 号への論文投稿者とのディスカッション、さらに「東日本大震災から 10 年、被災地は今」をテーマとしてオンライン研究会を 2 回開催した他、岩手県釜石市で開催された第 6 回ぼうさいこくたいではセッション発表をオンラインと現地での対面のハイブリッド型で実施し、後日動画配信を行った。

### 【『災害文化研究』第 5 号投稿論文の著者と語る会】

・日時：2021 年 8 月 21 日（土曜）10:00～11:30

・開催場所：オンライン Zoom 会場

・参加著者と論文タイトル：

○佐々木力也氏…「あの日、あの時」と「これから」

○黒田大介氏…災害時心のケア報道ガイドラインの作成に向けて

○外柳万里氏…大規模災害における遠隔地避難者支援の実態—もりおか復興支援センターを事例に—

・司会：山崎憲治氏（災害文化研究編集委員会）

### 〈意見交換・コメント〉

☆今回のような論文の投稿者の声を聴くという研究会の企画は、論文だけを読んで受ける印象や理解に加えて、論文の背後にある著者の人間的な心情や思考の軌跡を汲み取ることができ、論文に更なる厚みを加えることができるので、著者にとっても、読者にとっても、ありがたい企画だなと思いました。

☆佐々木さんのご発表にあった作文集「いのち」について、デブリーフィングの負の効果に通じる懸念もあることもよくわかりましたが、次の災害に備える段階にすでに入っていると思います。被災時の思いや願いを未来に残すことはとても大切なことだと感じました。ご発表で

は省略なさいましたが、ご論考の中では『田老村津波誌』の価値について触れておられます。作文集『いのち』も、やがてそのような史料となっていくのではないのでしょうか。（『田老町津波誌』はヴォイジャーには収められていなかったかと思います。宮古市立図書館田老分館にもないようでした。できれば田老一中にコピー複本でも置いて、ふるさと学習に活用できないものでしょうか。）

☆黒田さんのご発表は、知らなかったことばかりで大変勉強になりました。ラファエルの災害反応の経過は、悲しみを受け入れる 5 段階と通じるように思いました。報道すべき内容が各段階で異なってくることは当然だと感じました。また、報道だけでなく支援活動一般に通底するものであると理解いたしました。幻滅から立ち上がってくる段階でどんな報道や支援が必要なのか、「あいまいな喪失感」を癒すために具体的にどんなことができるのか、考えなくてはならないと思いました。地域への愛着心がもう一度よみがえるような支援の仕方、つまり地域の人の気持ちが嬉しくなるような活動が望ましいのではと感じました。

☆外柳さんのご発表については、当たり前のことですが、やはりハコではなく、人だなと、あらためて実感いたしました。せっかくできた復興住宅ですが、補助の期間が終わってしまうため、家賃が払いきれないほど高額になるという話をしばしば耳にします。具体的にはどういうことがわかりませんが、まだまだ「被災地」「被災者」のレッテルを外すことができる段階ではありませんね。

☆価値観教育では、人の生や死、戦争のような重いテーマを扱うこともあります。明日の命もわからないホロコースト禍中で作文を書いたアンネや絵を描いたハンナの生き方を共有しました。もし、急に家を出てどこかへ行かなけれ

ばならなくなった場合、自分で運べる旅行カバンの中に入れるもののリストを集めた時、ノートとペンを入れた子たちがいました。不自由で辛い時や孤独で苦しい時、楽しかったことを思い出して書くことで、つかの間でも自分の心を解放してケアをする方法があると知ったからです。佐々木先生が最重要とおっしゃる「ねがいとねらい」に関しては、有事で「2次被災をしても成長する覚悟」を日常から国語力で培っておけるのではないかと思います。今日は貴重な発表をありがとうございました。

☆池田晶子さん（故人）の言葉に、次のようなものがあります。「死の床にある人、絶望の底にある人を救うことができるのは、医療ではなく言葉である」（参考：『魂にふれる』若松英輔著 2021年 亜紀書房）この言葉が常に頭をよぎります。作文には、とてつもなく大きな機能があると思っています。その一つが、池田氏が述べている「救済」です。高橋銀児さん（小6で母と避難中母を亡くす、体験作文「生きなければならぬ」は『いのち』pp.4-5に掲載）は、言葉を必死になって紡ぎながら、生々しい被災体験を語り、亡くなった人への慰霊や復興への願いを伝えています。そして、どん底に落ちた自分自身の魂を救済するために、力いっぱい言葉を探し、前向きに生きる姿勢をも綴っています。作文指導での心のケアで大切なことは何か。荒谷アイさんは、担任である佐々木耕助先生がアイさんのそばでじっと寄り添っていたから安心して作文を綴ることができたと言っておられました。そして何度も田老町の町内放送で作文が紹介されたそうです。田老一中の作文指導では生徒の表情を見ながら複数体制で指導を実施したと思います。

☆各論考をめぐるディスカッションを通じて、心のケアと教育にせよ、心のケアと報道にせよ、異なる分野の人同士が相互理解を深め、それぞれの知見を広く生かしていく大切さを再認識させていただきました。

例えば、被災体験の作文を書くことは、教訓を次代に継承していく重要な教育実践ですが、

心のケアの観点からすると、一部の生徒にとって、過酷な経験を思い出すトリガーになる心配があります。その際、「リスクがあるから作文を書かせない」と思考停止に陥るのではなく、どうやって子どもたちのトラウマティック・グロースを促し、どうリスク管理しフォローすることでその子の心の落ち着きを取り戻すことができるかなど、心理や教育などの多職種連携の中から最適解を見いだしていくことが重要です。まさにこの研究会が、これからも対話、相互理解の場になっていけばいいなと思いました。

☆知り合いが、気仙沼で被災して、2011年に北上に避難しました。そこで、アパートに住んだのですが、たぶん役所（社会福祉協議会かもしれませんが）の方が、定期的に訪問してくれたのですが、訪問の際には「被災者の〇〇さん！」と、大きな声で明るく入ってこられて、とてもいやだったと話していました。励ましているのかもしれませんが、心には寄り添っていなかったのだと思いました。…被災した人への対応等いろいろ共有できていなかったために、心のアウエー感としては、外国とかに避難しているのに似ていたのかもしれません。

☆人間が生きたら、場所と人間関係が分け難く結びついた「場所の力」に支えられていると思います。その場所を失った、あるいは、その場所に戻れない喪失感が、遠隔地避難者にあると考えると、この方々に対する想像の連鎖が止まらなくなり、アフリカで出会った難民の風景と重なってしまいました。こんな気持ちを抱きながら、入居時に話し合っただけの事例がありました。それを可能にした関係者の努力、それを可能にした当事者たち、その話合いの光景はどんなだったのだろうか、と時間があればお聞きしたかった。また、これだけのエネルギーを持続されている外柳様ご自身の胸の内もお聞きたい、と強く思いました。 他

## 【ぼうさいこくたい 2021 での発表(S10)】

タイトル：災害文化の顕在化のこころみー日常の中に災害文化をよみとくー

日時：11月7日（日曜）10：00～11：30

場所：釜石市民ホール TETTO スタジオ A & Zoom 会場

発表プログラム：

〔趣旨説明〕 山崎友子

〔Part 1：災害文化とは～見て、聴いて、知って〕

三陸地域における明治・昭和の津波体験を知る学習から東日本大震災をへて新たな学習がつくる災害文化

- ・熊谷勲：綾里小学校での児童演劇『暴れ狂った海』を中心に
- ・佐々木力也：田老第一中学校の震災体験と地域の復興に向けた教育を中心に

〔Part 2：災害文化とは～気づいて〕

東日本大震災後の三陸の災害文化に気づいた活動がつくる災害文化

- ・田中成行：「命を守る言葉」の授業を中心に
- ・大野眞男：防災・復興を支える言葉の力について、釜石での活動を中心に  
& スペシャルゲスト：釜石漁火の会による「昔話命てんでんこ」と「震災甚句 あの日あの時」の披露

〔Part 3：災害文化の力～未来へ向けて〕

- ・山崎憲治：災害文化プラットフォームの提言

〈意見交換〉

☆災害文化を循環する「トータルに捉える」視点に共感します。日本人の精神性を育てて来た日本風土と災害文化の力から、今、「人間そのものをどう考え直すか」という示唆は、気候変動、脅威を増す自然災害と感染症で揺れて分断する世界の人々に日本発の大切な価値観を示すと考えます。「内は被災地で、外はその他に日本」ではなく、「内は日本国内、外は世界」、であって欲しいです。

☆災害文化研究会に参加させていただくと、「災害を」学ぶのではなく、「災害から」学ぶのだということを認識します。被災の辛さや悲しさ

に共感することにとどめず、それを「文化」として知識化、行動化し、次に備えることが大事だと気付かされ、学びになりました。

☆私は2019年のスタディツアーに参加し、そこで初めて「あの日あの時甚句」を拝聴しました。そのときに「災害文化」の大切さを実感したのですが、あれから数年経ち、課題に感じる場合があります。災害時に大きな打撃を受ける各地域の脆弱性を発見する、そしてその対策を地域に根付く文化を活用しながら強固にすることに加えて、そこから「自分事」に落とし込めるかという点です。たとえ、その地域に住んでいたとしても、「自分事」でなければ記憶から消えてしまうと思います。数々の継承活動を通して、いかにして「自分事」に置き換えられるかを考察する事もある意味、「災害文化」なのではないのだろうかと思いました。

☆漁火の会の方のパフォーマンスが素晴らしくて、泣けてしまいました。文章や映像で残すだけでなく、災害はこういう文化で伝える方が、とても強く、長く心に残るということを実感しました。画面左におられた方の、ダンスのような手話も素晴らしかった。ぜひ、地元だけでなくいろいろなところで広めていって欲しいと感じました。

他

## 【オンライン研究会「被災地は今」No.1】

話題提供者：大棒秀一 氏

特定非営利活動法人津波太郎（NPO 田老）理事長  
タイトル：東日本大震災から10年、被災地の今

～岩手県沿岸の学校アンケートをもとに～

開催日時：12月17日（金曜）19：00～20：30

趣旨：NPO 田老では、宮古市教育委員会の協力を得て、小中学校を対象として津波災害についてのアンケートを実施し、その結果を「ぼうさいこくたい 2021」で発表。子ども達の中で震災の記憶が薄らいでいることに驚かれたとのこと。学校教育に高い関心をもった地域住民と地域に開かれた教育行政の連携により得られたものは、実態の把握に留まらず、風化を防止する

工夫・知恵を見出していく地域創りに繋がるものと思われる。これからの10年、さらに未来を創る一つのモデルとして学び、意見交換を行う。

＊発表資料は下記 URL に。

<https://logos.edu.iwate-u.ac.jp/saigaibunka/2021/12/17/%e3%80%90%e5%a0%b1%e5%91%8a%e6%9b%b8%e3%81%82%e3%82%8a%e3%80%91%e3%82%aa%e3%83%b3%e3%83%a9%e3%82%a4%e3%83%b3%e7%a0%94%e7%a9%b6%e4%bc%9a%e3%82%92%e5%ae%9f%e6%96%bd%e3%81%97%e3%81%be%e3%81%97%e3%81%9f/>

## 【オンライン研究会「被災地は今」No.2】

トピック：災害時の外国人支援

ゲスト・スピーカー：大山美和氏

(岩手県国際交流協会)

開催日時：2022年1月24日(月曜)

19:00～20:30

趣旨：岩手の国際化の現状の中で、外国人の方の東日本大震災での被害の状況と対応、その後工夫された様々な支援について知ることから、災害弱者と言われる立場の方々の実情と支援のあり方へと広く意見交換を行う。

＊発表資料は下記 URL に：

<https://logos.edu.iwate-u.ac.jp/saigaibunka/2022/01/24/%e3%80%90%e5%a0%b1%e5%91%8a%e6%9b%b8%e3%81%82%e3%82%8a%e3%80%91%e3%82%aa%e3%83%b3%e3%83%a9%e3%82%a4%e3%83%b3%e7%a0%94%e7%a9%b6%e4%bc%9a%e3%82%92%e5%ae%9f%e6%96%bd%e3%81%97%e3%81%be%e3%81%97%e3%81%9f-2/>

〈意見交換・コメント〉

☆すばらしいご講演内容に感動しました。改めて、これまで担ってこられた多くの事柄に対して敬意の念でいっぱいです。熱意だけではない覚悟と展望をもって日々の業務にあたっておられることがしっかりと伝わってきて、大いに刺激を受けました。

☆中高生が外国人を助けられる存在になるよう導

く学校教育を。せっかく教科として外国語を勉強しているので、災害時に外国人の方々をどのように助けることができるか、中高生も知るべきだと感じました。中学や高校の体育館が避難場所になることが多いため、中高生がボランティアとして活動できる体制が整っていると、有事の際、大きな力になると考えます。

☆今後に向けて取り入れたいと思った課題は、外国人の駆け込み寺です。移民は経済の助けにはなりますが、付随する最悪事態を想定しておくことも備えです。経済なくして生命は成り立ちませんが、経済の土台に生命があります。国際結婚が破綻した場合、強制帰国対象になったり、生活に困窮したり、就職できなかったり、子供の就学や学業にも多くの問題が起こります。海外からの移民や移住者の駆け込み寺的存在が必要になり、生活保護支給や支援を余儀なくされる事態も想定して備えることが今後の課題だと思いました。

☆災害時多言語サポート実践研修会を受講したいと思いました。今まで、何回かチラシ等拝見しましたが、都合が合わず参加していません。是非、来年度は参加します。

やさしい日本語等は何か、文書とかチラシを作る際に非常に重要だと思いました。

災害は忘れられます。また、備えても、想定を超えることが十分考えられます。そのためにも、日頃から地域に住んでいる外国の方も、近所の人としての日々のつながり、交流を大事にしていきたいです。

☆今後の課題：

- ・在住外国人と日本人の関係をどのように構築していくかが課題だと思いました。当市では在住外国人の多くが実習生であり、職場以外で日本人と接する機会が少ないと考えています。その対策として事業も行っていますが、外国人と地域等がつながることの重要性をあらためて考えさせられました。

- ・「情報をどこから入手することができるのか」という情報の共有。外国人で、日本語がほぼ分からない場合、どこから災害情報を得られるの



かを知ることですら難しいのではないかと考えました。(自分自身、現在中国で、どのように情報を入手すればよいのか、誰に聞けばよいのか、がそもそもわからず、困惑することが多いです。)

- ・ 外国人に対しては、上記3つの価値の内、「そなえる」にあたる啓蒙や学びを構築し、やさしい日本語と英語を媒介としてストック情報を獲得させることが大切だと思います。そして、ストック情報とともにフロー情報を強化するために、人と「かかわる」ことを重視し、事業所や地域での避難訓練などの防災活動に積極的に参加することなどが大切ではないかと思いました。
- ・ 外国人の方が災害弱者ではなく地域の支援の担い手になってほしいという大きなねがいを実現するために、日本人とどのようにして日常的な「かかわり」「ふれあい」「交流」の機会を作っていくことが大きな課題だと思います。しかし、前提としての課題は、異文化を受け入れる日本人の懐を大きくしていくこと、その土台づくりが大切なのかもしれません。

☆ 1923年関東大震災の朝鮮人虐殺をきちんと押さえる必要があります。朝鮮人にとって発音しにくい言葉を発音させ、その発音が出来ない人間を殺戮し、見せしめにしましたが、東北出身者が(東北弁でも発音しにくい場合)犠牲になったことも生まれています。1917年のロシア革命、1918年の米騒動、1919年朝鮮での3.1独立運動など社会全体が動く予兆がその背

景にあったと思われます。関東大震災では、軍隊が復旧へ大きな力を発揮したため、日本国民はそこに期待をよせて行きます。それによって1931年柳条湖から始まるアジア・太平洋戦争に突入して行きます。根本にあった大アジア主義というものが、敗戦によってどうなったのでしょうか。高度経済成長時の東南アジア経済進出をどう評価するのか、また技能実習生としてのアジアからの多くの日本に来る人々の文化・言語をどこまで尊重し、他文化共生を具体的に創っているか、この日常が問われていると思います。もちろん入管施設で亡くなったスリランカ女性の問題もきわめて深刻な日本が抱える課題だと思っています。

他

\* 2020年4月に新型コロナ感染防止のため全国に緊急事態宣言が発出されて以来、研究会活動は、対面による活動に代わりオンラインによるものとした。「ぼうさいこくたい2021」での発表はオンラインと現地会場での対面のハイブリッド型による実施を選択し、さらにYouTubeを利用し動画でも見るようにした。研究会の他、MLで災害関連情報の提供を行った。諸イベントのスタッフ、情報を提供して下さった会員の皆様に感謝申し上げます。

## 【オンライン研究会「被災地は今」No.3】

トピック：「津波てんでんこ」再考

日 時：2022年3月4日 19:00～20:30

フリー・トークタイム：ク 20:30～21:00

指定発言者：

- ・大棒秀一氏（NPO 津波太郎 理事長）…被災地での実際1～昔からの言い伝えか
- ・山崎憲治氏（元岩手大学教授）…文献・資料から
- ・佐々木力也氏（震災時宮古市立田老第一中学校校長）…被災地での実際2～哀しい教えか＊加藤諒太さんの「命てんでんこ」にふれて

コメンテーター：斎藤徳美氏（災害文化研究会顧問）

趣旨：「津波てんでんこ」という言葉が、津波常襲地である三陸沿岸に昔から言い伝えられてきた、「親でも子でも、人には構わず逃げよ、という哀しい教えである」（『津波てんでんこ』、山下文男、2008）として、東日本大震災後全国に知られるようになった。が、本当にそうか、防災標語として適切か、被災地の実際や文献をもとに防災メッセージを検討する。

### ＜発言要旨＞

- ・大棒氏：親から聞いたことはない。津波サミット（1990）での山下氏の発言から生まれたと言われる。昭和三陸大津波の聞き取り資料には「命はテンデンコだから逃げろ、オレのことはよいから逃げろ」がある。明治では一家全滅という気の毒なところも多く（明治130戸、66戸、平成0戸）、家系を絶やさないという意味があった。自分だけ助かるということではない。現在言われている4つの意味は、勝手な後付け。
- 3) 山崎氏：①『津波の恐怖』（山下文男、2005）p.84の注にある犠牲者数から、昭和三陸大津波による田老・唐丹・綾里の犠牲者を年代別の表作成（本誌 p.31 参照）。10歳以上の年代ではほぼ同じ、10歳以下の死亡が30%を超え極めて多く、一家全滅多という推定をデータで示す。②昭和9年に三陸沿岸の6小学校（田老、大槌、唐丹、鶴住居、釜石、小白浜）で津波誌が編纂された。田老と大槌の津波誌には小学生の作文を掲載。この中には「テンデンコ」という言葉はない。当時は「30秒揺れたら、20から40分の間に津波が来る、家族で逃げよ」が避難マニュアルとなり、「高い所に逃げよ」を定着させようとしていることが、その後の資料から分かった。

③上飯坂哲氏（1938～2009、元吉里吉里小学校校長）は、上記6校の津波誌の復刻版として和綴じの手書き『津波てんでんこ考』を自主発刊（2005）。記録を読み自立して考え協力して行動することの大切さを説く。

- ・佐々木氏：人とかかわりあいが必要と思う私は、「津波てんでんこ」を前面に出して学校での教育を展開することはできなかった。田老一中の生徒達は、他人の命にも関心を持つ行動をとった素晴らしい子ども達。救える命は救える！「わたしの主張」コンクールに応募した加藤諒太くんの作文のタイトルは「命てんでんこ」。人とかかわりの中にも成長するという質の高い時間があったことが分かり、うれしかった。彼の作文から4つの教訓を抽出。①生命の大切さ…「命より大切なものはありません」②懸命に生きる…「どんなことがあっても逃げることを考えてください」③救命に尽力…「生きている人がいるかもしれないと、一生懸命にがれきの中を父さんと歩いた」④宿（運）命を自覚…「僕はあの日のことをたくさんの人に伝えたい。命を大切にしようと思えたい」。「津波てんでんこ」の生まれた背景を尊重しつつも、「命てんでんこ」は、一人一人の命と人とかかわることの大切さを強調、利己的にならず、協働して物事に当たることの価値を示唆、生き方や防災にかかわる多様な教訓・教育を見ることが可能。

### ＜意見交換とまとめ＞

東日本大震災前、「津波てんでんこ」は三陸で使われていなかったこと、弱者へ目を向けた避難の例、地域の経済的状況への配慮の例、ビッグ・データの活用、英訳できない「てんでんこ」の解釈等々の発言があり、警報のシステムができたが、避難が遅れる現在、教訓をリニューアルする必要があること、広く火山や戦争災害にも通用する防災を考える必要があることが確認された。コメンテーターから、究極の津波防災は「即避難」である。山下氏は「バラバラにでもすぐに逃げよ」という教えを発信したが、今は普段の相互信頼を培った上でじっくり語らなければ語弊がある。てんでんこができない災害弱者対策、美化された事例の再検討等、東日本大震災のさらなる検証を続けて、「即避難」のための次のステップの提案を、とまとめがあった。事後も多くの意見・資料の提供があった。

（災害文化研究会事務局）